

# 自由



## 巻頭言

国連総会出席のため訪米した宮沢外相は、ニューヨークという国際政治の検舞台で、中ソ両国外相との会談を果たし帰国した。いまや中ソ冷戦とも規定し得る中ソの角逐と抗争のなかで、日中平和友好条約をめぐるいわゆる「覇権」問題については、内外の目がこの一点に集中していただけに、今回の宮沢外交はきわめて重要な意味をもっていた。

二回にわたる喬冠華外相との会談について、宮沢外相は、「こちらの言いたいことはすべて言い尽くした。これ以上にも言うことはない」と記者会見で語っており、こうして日中交渉のポイントは中国側にあずけられたのである。つまり、中国側が「覇権反対は平和諸原則の一つ」というわが国の立場を受けられるか、文言上の妥協に同意するか、の二つの選択肢をわが国は中国側にあずけたかっこうである。

もとより、『水滸伝』批判とくに「現代の宋江」への批判に示唆されるように、内外での投降主義への批判が急速に高まっている中国において、わが国の立場が認められる可能性は少ないであろう。「覇権」反対が第三国を対象とするものでないことについても、喬外相は、中国も日本の立場を支持する北方領土問題で「ソ連に対し、何かしようということではない」から、「覇権」反対は特定の国のことをいうのではない旨語ったそうだが、この言い方は苦しい弁明で中国での「覇権」反対がまったく明白かつ即座に社会帝国主義への反対を意味することを思えば、いわゆる第三国問題では、日中双方にやはり根本的な開きがある。

しかし宮沢外相は、優柔不断で思いつき外交に偏りがちな三木首相のもとにありながら、その就任以来、当初の予想に反して、きわめて着実な外交姿勢を維持してきている。日韓、日台と田中・大平外相の勇み足を少しずつフィード・バックしてきた宮沢外相が、これからどんな手腕を見せるか、まさに国民注視の試練の秋である。